

病む子の祭

新美南吉

青空文庫

母

長男

長女

次男

三男（病氣の子）

岡おかのふもとの竹やぶにかこまれた小さい家。

母親が子どもたちに祭はれぎの晴着をきせている。

花火の音。笛、太鼓たいこのゆるやかな、かすかなはやし。

母

よごすんじゃないよ。いつもの着物とちがうんだからね、土堀どべいにもたれたり、土いじりしちやいけないんだよ。それから、袖そでではなをふいたりしないでね。ふところから鼻紙を出してはなをかむんだよ。

長男

ごわごわするなあ、この着物。

母

いい着物だからさ。ほらいいにおいがするでしょう。

長男

薄荷はっかみたいにするうつとするね。ぼくなんだか、心が軽くなつたみたいだ。わくわくするなあ、さあ早くいこうよ。

母

そんな大きな声をたてるんじゃないよ、よし坊が目をさますから。よし坊が目をさましたら、またつれてつてくれなくてきかないから。

長女 おつかさん、よし坊がなにかいってますよ。むにやむに

やつて、目をつむったまま、いってますよ。

母 目をさましたのかしら。そうじゃないわ。なにか夢ゆめでも

みたのよ。

長女 なんの夢、みたんでしよう。病気がなおつて、たこをあ

げてる夢かしら。よし坊は、しよつちゆう、たこをあげた
いっていつてたから。

長男 それからね、こまもまわしたいつて、いつてたよ。

次男 きのおぼくに、竹馬たけうまにのりたいつて、いつてたよ。

長男 ぼくたちがすること、よし坊は、なんでもしたいんです

よ。病気のくせしてね。かあさん。

母　よし坊は、みんなといっしよに、なんでもしたいんですよ。

よ。

長女　そうよ、かあさん。学校へもいきたいんだって。よし坊

をよくいじめた酒屋の三ちゃんがいてもいいのってきいたらね、三ちゃんがいても、学校へいきたいって。もう三ちゃんは、よし坊をいじめやしないってさ。

次男　そんなことあるもんかい。三太はだれでもいじめるんだ

よ。ぼくたちは同級だからいじめないけど、年下のものならだれでもなかすんだ。帽子をとりあげたり、堤どての根方ねかたにおしついたり、するんだよ。

長女　でもね、よし坊は栗くりの実をポケットにいっぱい持ってつ

て、三ちゃんに、もういじめないでねって、あやまるんだ
つてさ。よし坊はとても外に出たがるのね。

母

そう、外でみんなと遊びたいのさ。でも病気だからいけ
ないのですよ。病気がこの子にとりついていて、いかせな
いんですよ。病気ってどうしてこんな罪もない子にとりつ
くのでしょうか。

長女

おかあさん、よし坊はずいぶんやせたね。手なんかむぎ
わらみたいね。

長男

頭もあや子のゴムまりくらいだ。

次男

きのう、帽子がかぶりたいてっていったからね、ぼくが柱
からはずしてきてかぶせてやったら、すこすこしてたよ。

目までかぶさつちやつて、とてもおかしいんだよ。

母 さあ、たあちゃんはまだもうこれでいいのよ。こんどは、あや子。あや子にはどの着物がいいかね。

(たんすをあける)

長女 あたしは、唐とちりめんがいいわ。ほら、つばきの花の。

母 つばきの花のつて？

長女 おとうさんのお葬そうしき式しきとききたのよ。あたしよくおぼえててよ、こつちの肩のところに、つばきの花がふたつかさなつてたわ。こうするとよく見えるのよ。花のおいがかげるくらいのそばに。

母 ああ、これだね、まだきられるかしら。

(女の子きる)

母　すこし短いわね。むりもないね、あれから、もう四年に

なるんだから。

長女　これよ。あたし、この着物とても好き。ほらね、かあさ

ん、この肩んとところに花があるでしょう。お葬式でお墓はかに

いったときにね、あたしが叔父おじさんや叔母おばさんたちの間で

立ってたら、白いちようちようが舞ってきて、あたしの肩

のこの花にとまったのよ。あんどときあたし、おとうさんが

なくなつて、悲しくつてないてたわ。

母　こつちいおいで。ぬいあげを下ろしてあげます。おや、

なにか落ちましたよ。ねずみのふんみたいなのが。

長女 あらいやだ。それ、おしろいの実よ、おかあさん。

母 どうして、そんなものがはいってたの。

長女 おしろいの実をしまつとくとね、色が白くなるんだって、みんながいうんですよ。

母 おやおや。

長女 それから美しくなつて、みんながお嫁よめさんにもらいにくるんだって。

母 あきれた子だね。

次男 あんなこと、うそだね、かあさん。鯉こいちゃんとのねえさんはね、まえだれにいつぱいあつめてつたけど、ちつとも白くならないね。いまでもまつ黒だ。

母　　どこでそんなに、おしろいの実をとるの。

長男　　めくらのおじいさんの庭から、とつてくるんですよ。お

ばあさんがいるときはね、火箸ひばしを持って追っばらうもんだからね、ばあさんがいないときに、女の子たちは、とりにいくんです。

長女　　あら、あたしはそうじゃなくつてよ。あたしは、おキンちゃんのとこでいただいたのですよ。

長男　　あや子のこといってやしないよ。他の子のことだよ。そうするとね、かあさん、おじいさんは目が見えないでしょう。だからみんなが、おしろいの実をとつても知らないで、犬が庭にはいったかなって、いってるんですよ。

長女 あたしは、そんなこと一ぺんもしやしないわ、かあさん。

母 そんなこととしてはいけませんよ。でも女の子って、そん

なに色が白くなりたいのかしら。(笑う)

(このとき、次男の着つけも終わる)

(花火の音がする)

長女 あら、びつくらした。

次男 でかいなあ、いまのは、二尺かもしれぬよ。

長男 地ひびきがしたよ、表のつばきの花が落ちたよ。

長女 あたし、こわいわ、花火なんて。みぞおちのところがどき

んどきんするわ。

次男 おくびよう臆病だよ。すずめみたいだよ。さつき表で見たらね、

かあさん、すずめが花火のはじけるたびにとびたつて、裏山の方へ逃げてつたよ。もう村には、一わもいやしない。

長男

さあいこうよ。かあさん、おこづかいは。

母

さあ、たあちゃん、次郎ちゃん、あやちゃん。みんな二十銭ずつですよ。落とさないように、気をつけてね。花火やなんかつまらないものや、氷のものは、買っちゃいけませんよ。

次男

かあさん、ぼく、靴くつにあながあいてるから、よし坊のをはいてつていい？

母

もうあんたは、あなをあけちやつたの、まだ、こないだ買ったばかりじゃないの。

次男 だって、あながあいちやつたんだもの、ぼく知らないや。

母 うそおっしやい。なにかわるさしたんでしょ。あなたの

顔に書いてあります。うそをいう子は、顔が赤くなるからすぐわかります。さあどうしたか、いつてごらんなさい。

次男 けんちやんがわるいんだよ。

(泣きだす)

母 ないてもゆるしませんよ。さあ、男の子はなんでも正直に、男らしくいうもんです。

次男 けんちやんがレンズを持ってきて、黒いもんならなんでも燃えるから、やってごらんっていったから、ぼくうそだと思つて……。

母　それごらんなさい。あなたは、そんなことをするんです。

次男　だって、けんちゃんが……。

母　そらまたもうひとつ。あんたはわるいことをしたうえ、ひとに罪をなすりつけるのね、ふたつもよくないことをしたんですよ。そんな子はもう、おかあさんの子じゃありませんよ。

長女　ごめんなさいって、あやまりなさいよ、次郎ちゃん。

次男　かあさん、ごめんなさい。

母　もうこれから、そんなことするんじゃないやありませんよ。お家は^{うち}お金持じゃないんですからね。まずしいお家では、みんなが、品物をだいじに使わなきゃ、いけないですよ。

長男 おそくなるからもういこうよ。もうみんな、お宮へいつ

てるよ。

母 よし坊ちゃんのお靴、おまえにはけるのかい？

次男 うん。

母 じゃあ、あれをはいてらっしゃい。

長女 あ、よし坊が目をさました。

(みんな病気の子の方を見る。沈黙)

三男 にいちゃんたち、どこへいくの？

(母親、目顔で祭に行く子どもたちにだまつて

おいでと命ずる)

母 にいちゃんたちはね、学校で式があるので、いかなきや

ならないんですよ。

三男　うそいつてら。

母　うそじやありませんよ。お昼からね、校長先生のお話があるのさ。

三男　かあさん、うそいつてるよ。顔見ると、ちゃんとわからあ。

母　あら、この子は。

三男　ぼく知つてら。にいちやんたち、祭にいくんだよ。ね、そうでしょう。ぼくいま夢ゆめを見たの。去年の祭にきた猿さるまわしとね、ぼく、菜種畑なたね中でいきあつたの。去年はね、お猿が一ぴききりだったでしょう。今年はね、そのお猿と

赤ん坊の猿と二ひきできてるの。ぼくが菜種の花をちぎってなげてやったら、大きな猿が、とてもじょうずにうけとってね、小さいお猿に半分ちぎってやって、パクパクたべたよ。

母

そう、それはよかったね。にいちちゃんたちはじき帰ってくるからね、よし坊ちゃんはおあさんとお家で待っていてましようね。

三男

いやだ。ぼくもいくんだ。

母

そんなこと、いうもんじゃありません。起きちやいけませんよ。お医者さんがおっしゃったでしょう、じつとしてなきや、病気はなおらないって。

三男 いやだ。ぼく見たいんだ。猿さるまわしやお芝居しばいが。

母 お病気がなおつたら、町へつれてつて映画を見せてあげるから、きょうはおとなしくかあさんと待つてましようね。そのかわり、ねえちゃんにいいものを買つてきてもらいましよう。よし坊ちゃん、なにがほしいの。

長女 絵本買つてきてあげましようか。

三男 いやだ、ねえさんのほか。

母 そんなにあばれちやいけません。お腹なかがまたいたくなり
ますよ。さあ、おとなにしてましようね。

次男 もういこうよ。

(靴をはきかかる)

三男 あ、次郎ちゃんは、ぼくの靴くつをはいてる。いやだい、い

やだい。ばか、ばか。

母 あのね、よし坊ちゃん、あんたにはもつといいのを、買

ったげるからね。

三男 いやだ、いやだ。次郎、ばか。かあさんばか。みんなば

か。

母 そんなにさわいじやいけません。ほうらごらん、こんな

に汗ひたが額たいに出て。顔が青くなりましたよ。次郎ちゃん、じ

やあきようは、あんたのお靴くつはいてらっしゃい。

次男 だって、よし坊はもうはかないんじゃないの。

三男 次郎ばか、次郎ばか。

母

あんたまで、そんなことをいうのね。みんなでかあさん
をいじめるんだわ。いいよ、かあさんをそんなにいじめる
と、早くしわがよつておばあさんになって、死んじやうか
ら。

次男

ぼく、そんならじぶんのをはいてくよ。さあいこう、に
いさん。

母

危あぶないとこへいくんじゃないよ。花火やよつぱらいのそば
にいつちや、いけませんよ。そして、暗くならないうちに
帰ってくるんですよ。

長男次男

うん。

長女

じゃ、よし坊ちゃん、いいもの買ってきたげるから、待

三男

つてらっしやいね。

やだ。ねえちゃんもいくの。ねえちゃん、いつちやいやだ。

長女、戸口のところで思案する。

長男、次男、出ていく。

母親、身ぶりでいきなさい、と長女に命ずる。

長女出ていく。すると、病気の子がまた「いやだ、ねえちゃんいつちやいやだ」とさけぶのでいきかねている。

母は早くおいきと身ぶりで示す。ついに長女はすがたを消す。

病める子、急になきだす。

母

さあ、なかなかいで、よし坊。ねえさん、じき帰ってき
くれるからね。おまえは、いい子だから、かあさんのいう
ことをきくんですよ。さあ、おとなしくねんねしましょう。
そのうちにおはやしが、この辺までやってきますからね。
いいでしょう、よし坊、おまえのすきな笛や太鼓たいこがやつて
きますよ。

三男

うそだい。おはやしなんかここまできやしないや。塩屋
さんとこまできて、あそこからまた帰っていつちやうんだ。
ぼく去年ついてきたからよく知ってら。

母

おや、そうかい。でも塩屋さんとこまでくれば、おはやしの音がよくきこえるから、いいじゃないかい。大太鼓の音が、どうんどうんてお家の障子しょうじにひびいてくるよ。いいでしょう。

三男

かあちゃん。

母

なんだい。

三男

ぼくにも、祭の着物をきせてくれよ。

母

おまえさんは祭にいかないじゃないの。

三男

ぼくも祭の着物がきたいや。にいちちゃんたちみんながき

たんだもの。

母

そうかい。それじゃ、よし坊ちゃんにもきせてあげよう

ね。

(母親、たんすから一枚の晴着をとり出す)

三男　それじゃないよ。そんなの学校にあがったとききたんだよ。

母　おや、かあさん、忘れっぽいね。ではこれだね。

三男　うん。

(母親きかえさしてやる)

三男　かあちゃん。

母　なにさ。そんなにしげしげと。

三男　子どもがおとなになるってほんと？

母　ほんとですよ。みんながどんどん大きくなって、おとな

になるんですよ。

三男 おかしいなあ。

母 おかしかりませんよ。よし坊ちゃんも、にいさんやねえさんたちも、おとなになるんですよ。

三男 いつのこと？

母 まだ十五年も二十年も先のことさ。

三男 いくつねるの？

母 さあ、千も万もねるんでしょう。

三男 おかあさんは、はじめからおとな？

母 おかあさんだって、はじめは子どもだったんだよ。おねえちゃんみたいだったときもあるし、もっと小さな赤ん坊

だつたこともあるのさ。

三男 　いつのこと？

母 　ずっとむかしのことさ。

三男 　ふうん。おかしいなあ。かあさんは、はじめからおとな
じゃなかつたの？

母 　そんなことありませんよ。どこのおかあさんでも、はじ
めは赤ん坊で、それから子どもになって、それから娘さん
になって、それからお嫁にいつて、それから子どもをうん
で、そして、おかあさんになるのさ。

三男 　（じぶんの腕を見て）ぼく、おとなになれるかしら。ぼ
く、おとなにならないよ。そんな気がするんだもの。

母 なれますよ。いまに、大きくじょうぶになりますよ。

(長女だまっではいつてきて戸口で立っている)

母 おや、あやちゃん、いかなかったの？

(長女うなずく)

母 なにか忘れたの？

(長女、首を横にふる)

母 どうしたのさ。びっくりしたみたいに目を見はって。

長女 あたし、かねつきどう鐘撞堂の下んところから、帰ってきたの。

母 こっちへ、おいで。戸口のどこになんか立っていないで。

まあ、どうしたのさ、息なんかきらして。どうして鐘撞堂のところから帰ってきたの？

長女 あたし、なんだか知らないわ。なんだか知らないけど走

ってきたの。鐘撞堂のところまでいったら、一ぺんで帰り
たくなつたの。

母 へんな子だね。じゃあ、もうお祭にいかないの。

(女の子うなずく)

母 せつかくあそこまでいって、帰ってくることもなんかない
じゃないの。あそこからもうじき、お宮さんじゃありません
か。あとでいけばよかつたって、知りませんよ。

長女 いいのよ、おかあさん。

母 それじゃあ、そんなとこに立ってないで、こつちへいら
つしやい。(病気の子どもに)よし坊はもうお薬を飲まな

きやいけませんね、まだあつたかしら。おや、もうからで
すね。それじゃあ、かあさんがお薬をとつてきますから、
よし坊ちゃんねえさんと遊んでるね。

(長女あがつてきて、よし坊の枕もとまくらにすわる。)

母、用意をする)

三男　かあさん、近道していくといいよ。

母　近道つて？　おまえお医者さんのお家へいく近道知つて
るの？

三男　井戸車のある家と、めくらのじいさんのお家の間をとお
つていくとね、杉すぎの垣根かきねにあながあいてるからね、そこを
くぐると、お医者さんちの裏だよ。垣根をくぐったときに

ね、頭に気をつけないと、物置からさがってる樋とにぶつか
るよ。

母 あきれた子だね。そんなところをくぐって遊んだのかい。

おかあさんは、そんなところはとおれませんかよ。

三男 あそこからいくと、とても早いや。

長女 あそこはもうとおれないのよ。井戸車のお家とめくらの

じいさんちの間に、からたちの垣根を結んじまったから。

よし坊ちゃんはまだ長い間見ないから、知らないんだわ。

母 ではいつてきますよ。

三男 かあさん、お医者さん家のかどんどこで、去年の綿砂わたざと

糖とうのおじいさんが売ってたら、買ってきてね。

母 綿砂糖って？

三男 綿みたいになつた砂糖だよ。

母 そんなものを、おまえはたべちゃいけないですよ。かあさんが、卵を買つてきておいしく煮にてあげるからね。

(病氣の子、このあたりから力が衰える)

三男 卵なんて、しよつちゆうたべてるんだもの、いやだい。

母 じゃ、お医者さまにきいてみて、たべていいつておつしやつたら、買つてきましようね。

(母親裏口から去る)

(花火の音)

三男 いまの花火、きつと旗が出たよ。

長女 見てきましようか。

(長女縁側^{えんがわ}に出て空をあおぐ)

長女 あら、ほんとうに旗が出たわ。雲の下を、北の方へ流れ

ていくわ。……あいま、学校のうしろの山の上ころよ。

あら、山のとつぺんで、だれかが旗の方に手をふっててよ、
……もう見えなくなっちゃった。

三男 山の上にだれがいるの？

長女 だれだかわからないわ。

三男 先生じゃないの。

長女 見えやしないわ、そんなことまで。

三男 だめだなあ、おねえさんの目なんか。

(女の子、枕もとにすわる)

三男 旗は、どこまでとんでくかなあ。

長女 やた村に、きつと落ちるわ。

三男 やた村で落ちないで、もつとどんどんとんでつたらどこへいくんだろう。

長女 知らないわ、そんなこと。

三男 どっかの黒い海にいくよ。

長女 そうかしら。

三男 だめだなあ、おねえさんなんか。なんにも知らないや。

長女 知ってるわ、あたしだって。

三男 知らないや。

(沈黙。すぐ近くでひばりが鳴きはじめる)

三男

くにちゃんところでもらった雛ひなを持っておいでよ。

長女

どうするの？ よし坊ちゃんかねてる間に、もう餌えをやつといたわよ。

三男

もってこいよ。

長女

もってきてどうするのさ。にいさんたちに見つかりと、とりあげられちまうわよ。

三男

にいちゃんたち、祭にいったら、ばか。

(女の子、裏口から出て行って、すぐボール箱ぼこを持ってはいつてくる)

三男

箱はこから出して、ぼくの手にのせてくれよ。

長女　だめよ、そんなことしちや。まだ弱いんだから、手にと

つたら死んでしまうわよ。

三男　いいんだつたら。

長女　いやよ。あたしがくにちやんとこのおじさんにいただいた

てきたのよ。この雛ひなは。

三男　だつて、ぼくとふたりでだいじにしろつていったつて、

ねえさん、ぼくにいったじやないか。

長女　……………

三男　ぼく、手にのせて見たいんだよ。

長女　あれ、うそよ。

三男　なんだい、うそなことあるもんか。くにちやんとこのお

じさん、ぼくとなかよしなんだもの。

長女　いいえ。うそよ。あたし、よし坊ちゃんを喜ばしてやろ

うと思つて、うそいつたのよ。ほんとうは、あたしだけに
くれたんだわ。

三男　なんだい、ねえさんのうそつき。そんなら、そんなもの、
殺しちゃうぞ。

長女　いやだわ、いやだわ。

三男　よこせ、よこせつてば。

長女　よし坊ちゃん、いやよ、そんな顔しちや。

三男　よこせつてば。ねえさんばか。あや子ばか。よこせつて
ば。

(女の子、策つきて箱から雛ひなをとり出して病氣

の子に渡す)

長女

ね、お願いだから、殺さないでね……あつ、いけないわ、そんなににぎつちやあ……こわいもんだから、足がぶるぶるふるえてるわ……もうはなして……よし坊ちゃん……もうはなしてよ、よし坊ちゃん……。

三男

ぼくの手にふるえが伝わってくるよ。軽いなあ。

長女

かあいそうだわ。足をもがいてるわ。そんなに持つてると、びっくらしして死んじまうことよ。

(病氣の子そつと雛をもつたまま、長く見てい

る)

長女

(女の子安心する)

毛、やわらかいでしょ。

病気の子、だまって雛をかえす。

女の子箱にしまつて、裏口から出ていく。

はやしの音が近づいてくる。

微風びふうの中から桜の花びらが病気の子のわきに落ちる。病

気の子は動かない。

女の子入ってくる。

長女

おはやしがこつちへやってくるかね。

三男 塩屋さんとこまでくるきりだい。あそこからまた帰って

しまうんだ。

長女

あの太鼓たいこね、おキンちゃんことしとこのにいさんがたたいてるのよ。今年ことしはじめてだった。

(はやしの音止やむ)

長女

あら、もう塩屋さんことしとこのまえまできたわ。あそこのしいの木の下で休むのよ。

三男

……………

長女

(心細くなつて) かあさんもう帰ってらっしやらないかしら。よし坊ちゃん、ねむくない？ すこし風が出てきたわね。障子しょうじしめましようか？

三男 しめなくてもいいや。

(このあたりから病気の子の声、とみに衰える)

長女 でも、あたしなんだか寒いわ。裏のやぶがさわいでるわ。

(はやしの音、再びはじまる。そしてだんだん

遠ざかっていく)

長女 あら、もう帰っていくのね。

(間)

長女 よし坊ちゃん。

(間)

長女 よし坊ちゃん。

三男 まだきこえるね、ねえちゃん。

長女 ええ、まだきこえるわ。もうじき、土塀どべいの家の角かどをまが

ると、きこえなくなるわ。ほら、もうきこえなくなつたで
しよう。

三男 まだきこえるよ。

長女 でももう蚊かが鳴くほどだけよ。

(間)

長女 もうなんにもきこえなくなつてよ。こんどは、村のあつ
ちのはしへいくのだわね。

三男 まだきこえるよ。

長女 あんたの耳の中に笛の音が残つてるんだわ。

三男 まだきこえるよ。

(間)

長女 なにをそんなにあたしの顔見てるの。いやよ、よし坊ち

やん。

三男 もうせん、ねえちやんと花のかくしっこしたろう。

長女 いつのこと？

三男 ぼくが病気になるまえにしたよ。貝がらでふせて土の下にかくしたじゃないか。

長女 あ、そうね。あんときよし坊ちやんがかくしてきたの、あたしいくらさがしても見つけなかったわね。そして、よし坊ちやんが、あの日の夕方から病気になったから、あれきりになったんだわ。どこへかくしといたの？

三男 裏のきんかんの木の下だよ。

長女 あら、よし坊ちゃんずるいわ。かけひの向こうはやぶだから、いけないってきめてあつたじゃないの。ずるいわ、よし坊ちゃんたら。

三男 まだあるかなあ。

長女 あんなどこだれもほらなくてよ。あたし見てこようか。

(女の子裏口から出ていく。やがて貝のからを
持って帰ってくる)

長女 あつたわ。かけひで洗ってきてよ。

三男 花はあつた？

長女 しなびてたわ。

三男　しなびてた？

長女　しなびるわよ、冬を越したんですもの。

三男　ぼくのかばんのお弁当入れるところにね、もうひとつ貝があるから持ってきて。

（女の子さがして持つてくる）

三男　それ合わせてごらんよ。うまく合う？

長女　うまく合うわ。ほら、ちようどてのひらを合わせたみた
い。

（それを病気の子に渡す）

三男　まだ鳴るかなあ。

（口にふくんで弱々しくふく。鳴らない）

長女 土の中にあつた間に、どこかきつと欠けたのよ。

三男 鳴るよ。……じつときいてると、いっぱいになるよ。……

……風の音や笛の音がするよ。……たくさんの音がするよ。
どこか遠くの方へ消えていくよ。

長女 うそよ。なにもきこえやしないわ。

(病気の子、貝をくわえたまま耳をすましてい
る。間)

三男 ねえちゃん、……ぼくなんだか軽くなった。あ、ぼくも
とんでくよ。風の音や笛の音の中をいっしよに……おかあ
ちゃん……ああ、ぼくもとんでくの……。

長女 なににいつてるの、よし坊ちゃん。あんた、どこ見てんの。

三男 花びらや笛の音といっしよに流れてくの。

(女の子とつぜん恐怖きょうふにとらわれて立ちあが

る)

三男 かあちゃん……。

長女 (さけぶ) よし坊ちゃん! かあさん! あたし、かあ

さんよんでくるわ。よし坊ちゃん、待ってんのよ!

(女の子裏口からかけ去る)

三男 (弱く) かあちゃん……よし坊とね、鳥もいっしよにと

んでくの。

(間)

(やぶのさわぐ音)

三男

(さらに弱く) かあちゃん……ぼく遠いの……。

いっそう、やぶのさわぐ音。

風の中から桜の花びらが落ちる。

病気の子の上に、かたわらに。

—幕—

青空文庫情報

底本：「牛をつないだ椿の木」角川文庫、角川書店

1968（昭和43）年2月20日初版発行

1974（昭和49）年1月30日12版発行

入力：もりみつじゅんじ

校正：渥美浩子

1999年7月4日公開

2006年1月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

病む子の祭

新美南吉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>